

専徳寺報

第476号

令和5年9月15日発行

浄土真宗本願寺派
専徳寺

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000

http://sentokuji-iwakuni.net/

岩国 専徳寺

検索

専徳寺納骨堂受付中

●参拝セット(念珠・聖典・式章・聴聞カード)
どうぞお持ちください。



本願寺布教使
中島 昭念師
(美祢東組明厳寺)

一講師

9月29日(金) 昼 1時半〜3時半
30日(土) 朝 10時〜12時

日程

秋のお彼岸をご縁に法座を開きます。にぎにぎしくご参詣ください。

御案内

秋讃仏会法要
(併修戦没者追悼法要)

如来・人・言葉 131

簡ばず、問わず、論ぜず

都呂須孝文 (元仏婦総連盟講師)

アメリカの宇宙飛行史上、はじめて日系人が宇宙船に乗った、というところで話題になった方が、ハワイ日系人のエリソン鬼塚氏でありました。一九八〇年(デイスカバリ号)のことでした。

ご法義の篤いご両親に育てられた鬼塚氏は、仏教徒であることに誇りをもっておられましたから、「日系人としてはじめて」というより、キリスト教圏のアメリカで「仏教徒としてはじめての宇宙飛行士」といった方が適切であるかもしれません。

さて、鬼塚氏は、そのデイスカバリ号から地球を見た感想を次のように述べています。

「宇宙船の窓から外を眺めていると、この世で最も美しい景色の一つがそこにあります。

地球を見るチャンスに恵まれた人にとって大切なことは、地球にはどこにも国境というものがない、ということが判ることです。そこには国と国とを分ける線も境もなかった。なのに、国境をつくり、差別をつくり、争っている現実



に深い悲しみを抱いた。地球は壊れそうだと。ちなみに、その六年後の一九八六年、二回目のチャレンジャー号に乗った氏は、思わぬ事故によって六人の飛行士と共に宇宙に消えていったのであります。

「そこには国と国とを分ける線も境もなかった」という氏の言葉には、人間の虚妄分別によって国境に線を引き、争いあう愚かしさを大悲されている如来のまなざしが、その背後にあったのではないかと思うのは、穿ちすぎでしょうか。

『歎異抄』第一章に、

弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらはれず、ただ信心を要とすとすべし

また、「教行信証」「信巻」に、

おほよそ大信海を案ずれば、貴賤縊素を簡はず、男女・老少をいはず、造罪の多少を問はず、修行の久近を論ぜず……

と、如来よりたまわる信の世界は、老と少、善と悪、男と女、貴と賤等々、境をつくり、線を引いて優劣をみようとする私どもの、永い間しみついた癖が打ち破られて、大いなるいのちと光の世界に心開かれていく喜びが述べられています。

「簡はず」「問わず」「論ぜず」とは何とひろやかな世界でしょうか。

※ ※ 「簡はず」の「簡」は、要らないものを取りのぞく、余計なものを取りはずすという意味をもっているそうです。今は、「簡はれず」「簡はず」ですから、如来の前には、要らない人などいない、余計な人など一人もいない、ということでもあります。

※ ※ 生きていることはよいことで、死んでしまつたらダメと分別し、若い時はよいけれど、老いたら不幸と決めつけ、健康が一番、病気になるたらおしまいと優劣を分けているのは、すべて人間の妄想であることが、如来の本願に聞きふれて知らされるのであります。

※ ※ 本年の年賀状の中に、八十三歳のおばあちゃんからいただいたものがありました。

※ ※ 「独居老人、長生きするのも芸の内とか申します。この頃の世の中の出来事に怒り、悲しみ、喜び、笑いながら、皆さまの感謝の気持ちをお忘れず、如来さまのお慈悲と、人の愛によって生かしていただけて居ります。ジタバタしたところが始まりません。なるようにしかならないの

ですから。これからも、ゆっくり静かに待つ心で……参ります。釈清心拜

※ ※ 法名で終えておられるのが嬉しいのですが、それよりも、いやそれゆえに、老いや死を柔らかに受容されているのが、何とも嬉しく、あらためて如来の願力のたのもしさが知らされたこととあります。

※ ※ また、人それぞれの生き方を、善悪、正邪、賢愚という物指しでみられますと、厳しく、つらいことですね。

※ ※ とりわけ、宗教において、この物指しで計られますと、許されない者、救われないものをつくり出していきます。

※ ※ 「善悪の人を簡はず、問わず、論ぜず」と仰せられる如来の眼には、許されない者は一人もいないのです。救われない者も一人もいないのであります。

※ ※ ご長男が意識不明で入院されていて、自らが治療をされていた東井義雄先生に「阿弥陀仏を信じているから罰が当たったのだ」という手紙がきたそうです。その返事に、先生は、「非行に走っている生徒や勉強のできない子を責めたり、罰則をあたえたり、退学させたりするのはホンモノの教師ではない。この子たちに、どうすれば生きる喜びに目覚めさせることができるかを考えていくのがホンモノの教師と考えています。私は『たとい罪業は深重なりとも必ず救う』と喚んでくださるホンモノの阿弥陀さまを仰ぐばかりです」と書かれたそうです。



※ ※ 『季刊せいてん』(No.29・平成6年12月発行)より

寺内だより

み仏にいだかれて [葬儀勤修]



●ご恩を偲び [法事勤修] 8 / 1 ~ 9 / 11

ついたち礼拝(月のはじめをお寺から)

10月1日(日)(第117回)、11月1日(水)(第118回)

午前9時より45分間。正信偈和讃・法話。